様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月　 ３ 日現在

機関番号：３２６７０
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2012～2014
課題番号：２４６５２１７２

研究課題名（和文）フォークロア・パラドクスを止揚する

研究課題名（英文）The "Aufhebung" of Folklore Paradox

研究代表者
中西　裕二（NAKANISHI, YUJI）

日本女子大学・人間社会学部・教授

研究者番号：５０２３７３２７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,900,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究の出発点は、中世にまでさかのぼれる、とされる日本の宗教民俗文化は何を意味しているのか、という問いである。日本民俗学では、それを「常民」の文化と考えてきた。しかし、本研究での仮説は、それは本質的な「常民の文化」ではなく、当該地域の宗教的な民俗文化の史的形成過程を表し、その主体は民衆ではない、というものである。この矛盾を「フォークロア・パラドクス」と概念化し、日本各地の宗教民俗文化の再検討により、この概念が有効であるという結論に達した。

研究成果の概要（英文）：A starting point of this study is what Japanese folk culture of religion means, which is able to be trace back historically until the medieval period. Japanese folklorists have regarded it as a culture of folk people, especially agricultural villagers. But our hypothesis in this study is that a culture of masses is not represented in it but historical formation process of folk culture of religion is, and that the subjects of folk culture are not folk people. We conceptualized this contradiction as “folklore paradox”, re-examined folklore date of religious culture by fieldworks and library works, and came to the conclusion that application this concept to it is valid.

研究分野：文化人類学・民俗学

キーワード：民俗学　宗教民俗　中世仏教　顕密仏教　民俗芸能　陰陽道

１．研究開始当初の背景

日本の宗教民俗文化研究は、おもに日本民俗学、その中でもとくに民俗宗教論において、村落居住の民衆＝常民の文化研究としておこなわれてきた。この枠組みにおいて、宗教的実践主体としての常民は、同時に民俗宗教の枠組みの創造主体としても記述される傾向がある。だが、これは正しいのであろうか。近年の、日本民俗学の隣接領域（歴史学、宗教学、文化人類学など）から出された問題群は、日本の宗教民俗文化は、日本の民衆（常民）の本質的な宗教文化・宗教的観念の反映というより、民俗社会とその外部の広い社会的枠組みとの関係性、村落外部の宗教体系の権力性・正当性、中世仏教の重要性など、民俗文化のいわば外部性とも言うべき要素を反映しているのではないか、という指摘である。従って、宗教民俗文化の研究から導かれるのは、民衆は外部世界のどのような社会的枠組みのもと、どのような宗教世界を生きてきたのか、という点であり、それは取りも直さず、宗教民俗文化は、民俗という範疇を越え、かつそれを包括する宗教的枠組みにおいて意味をもち、民衆はそこにおいて初めて宗教的実践主体となる点を意味している。このような視座は従来の宗教民俗文化研究には欠如しており、そのため、日本民俗学で見られる、宗教民俗文化の主体としての民衆像を一旦解体し、新たな宗教民俗文化の視座を確立する必要がある。

２．研究の目的

歴史的に古いと考えられる宗教民俗文化を日本民俗学的に記述、分析しようとすればするほど、記述が実践主体から乖離し、分析に民俗概念が不要になる傾向性があることが、研究代表者・分担者らの従来の研究が指摘していた。本研究では、その点を「フォークロア・パラドクス」と呼び、日本の宗教民俗文化研究が概ねこのパラドクスを抱えている点を、従来の民俗誌的テキストの分析、史料を援用した外部の宗教的枠組みの明確化から明らかにする。また、フィールドワークから「フォークロア・パラドクス」の視点を用いた、従来の宗教民俗文化研究の脱構築を試み、宗教民俗文化の新たな記述と分析をおこなう。これにより、「フォークロア・パラドクス」概念の有用性を示し、これに代替する、民俗世界における民俗文化像について再検討をおこなう。

３．研究の方法

本研究では、1)従来の宗教民俗文化研究に関する文献を精査し、それらの文献におけるフォークロア・パラドクスについてテキスト分析をおこなう、2)文化人類学、歴史学、宗教学の分野からの、日本民俗学の民俗宗教研究に対する批判をまとめ、それをフォークロア・パラドクスの観点から論点整理をする、3)フォークロア・パラドクスの研究から導かれる新たな宗教民俗文化像を相互に検討し、従来の宗教民俗文化像の代替モデルを提示する実験的フィールドワークを、代表者・分担者の共同作業として進める。

４．研究成果

(1)宗教史における連続性と不連続性

従来の宗教民俗文化研究では、民俗文化の母体であるムラにおいて、宗教民俗文化は、多少の変化があったにせよ、伝承され続けてきたとされている。しかし、先史時代も含め、カミの概念は常に変容を続けており、それが日本の宗教文化で顕著である点が、文献研究や史料検討から明らかになった。

この、宗教文化におけるカミ観念の歴史的不連続性が文化史の前提となるなら、宗教民俗文化のみがその埒外にある、とは考えにくい。その点を考える好例が、祖霊信仰である。従来、日本民俗学においては、祖霊信仰が山岳信仰と結びつき、日本人の祖霊観念の元型を作り出したと考えられてきた。しかしながら、中世以前にはその種の観念が文献史料に登場せず、墓標などの物質資料からわかる祖霊と山岳霊場の結びつきは近世以降である。従って、日本の祖霊信仰と山との関係は、民俗文化における原初的信仰というより、むしろ新たに成立した宗教民俗文化と考えた方が妥当といえる。

そうすると、祖霊信仰と山岳信仰の重なりは、いかなる契機により成立したのだろうか。その際、中世に成立する山岳の寺社組織（寺社勢力）の、民衆に対する影響力を考えるべきであろう。熊野信仰といった、中世以降民衆に強い影響力をもった信仰も、その担い手は当然寺社であり、その全国への伝播の要因の一つが、神仏習合による熊野三山＝浄土への結縁の地という観念であった。つまり、寺社勢力により、浄土思想を介して死霊と山岳霊場が結びつく可能性も排除できないのである。宗教民俗文化研究において、その核とも言える祖霊信仰にも、フォークロア・パラドックスの視点の適用可能性を示すことができた。

(2)中世寺社勢力と宗教民俗文化

本研究で提示するフォークロア・パラドックスを最も体現している宗教形態が、神仏習合である。この宗教的観念は明治維新期に全否定され、禁止されたにもかかわらず、いまだに宗教民俗文化の中に見られる。また、神仏習合思想はその出自が仏教の側（顕密仏教、または中世仏教と呼ばれる）であり、土着のカミ観念も包摂しながら、その後日本全土に浸透したことがわかっている。

本研究では、大分県国東半島、山形県寒河江市の慈恩寺、福岡県糸島市、福岡県田川郡添田町の共同調査を実施し、また研究代表者・分担者が個別に福岡県東部京築地域、香川県三豊市弥谷寺、岡山県吉備中央町円城寺、富山県魚津市小川寺の調査をおこなった。こ

れらの地域には、規模の大小はあれ、中世において寺社複合体としての一山組織がかつて存在した、あるいは、形態は変化したにせよ、現在もその痕跡を残している寺社が存在している。従って、当地の宗教民俗文化の中にも神仏習合的要素を多く見出すことができる。

本研究では、日本の宗教民俗文化が、地域的偏差を持ちながらも基本的に類似した構造をもつのは、地域における宗教民俗文化のひな型が、神仏習合を中心とした顕密仏教・中世仏教の中にあり、荘園制の発達に伴う中世寺社組織の全国への展開に伴いそのひな型が伝播したのではないか、そして、それら寺社組織のもつ政治・経済力が崩壊することにより、それらの宗教儀礼などが宗教民俗文化として村落に残ったのではないか、という仮説の可能性を検討した。

これは、宗教民俗文化の主体は、初めに顕密仏教・中世仏教の側にあり、それが徐々に民俗の側に移行するという史的仮説である。その点について、宗教民俗文化を代表する、神楽などの民俗芸能、諸々の儀礼を通して検討をおこなったが、この可能性を排除することができないとの結論に至った。

つまり、「研究の目的」で述べた“歴史的に古いと考えられる宗教民俗文化を日本民俗学的に記述、分析しようとすればするほど、記述が実践主体から乖離し、分析に民俗概念が不要になる傾向性がある”とは、宗教民俗文化の主体がそもそも民俗（村落の民衆）の側になく、宗教の側にあったためだと言うことができる。

(3)宗教民俗文化の諸言説の再検討

日本の宗教民俗文化の形成において、1980年代以降、民衆に近い存在であった呪術的宗教者、すなわち修験者、陰陽師が宗教民俗文化形成において重要な役割を果たしていた、という論が多く見られた。しかし前述のように、修験者については、前述の寺社組織を形成する宗教者と見なすことができる。

また陰陽師については、民衆の中にあったとされる民間陰陽道の存在について疑義が持たれる点が指摘された。また、陰陽道と類似した思想に、密教における宿曜道が挙げられるが、陰陽道と宿曜道は起源を異にするもののその区分は不明瞭であり、民俗社会に存在した陰陽道的知識の所有者＝民間陰陽師という概念からまず再考しなければならない。また、中世寺社は、この種の知識の保有母体と見なすことがもちろん可能なのである。

このように、従来、民衆に近い呪術的宗教者が宗教民俗文化形成に関与した、という言説は、宗教民俗文化という範疇を民衆の側に引きつけ、民衆の外部にあった宗教的枠組みのあり方を極めて単純化したと言うことができる。これも、一種のフォークロア・パラドックスの例と言えることができる。

(4)宗教民俗文化の再構築から日本文化史の再検討へ

このように本研究では、従来、日本人が継承してきた民俗文化と素朴に考えられてきた宗教的文化について、フォークロア・パラドックスという考えを端緒に再考を重ねた。その結果、(1)で述べた、カミ観念の歴史的不連続性を考慮すれば、現在の宗教民俗文化のひな型が顕密仏教・中世仏教に基づく寺社複合体から提供され、その後民俗化していったという史的仮説を検討する意義が大きいという結論に至った。(3)で指摘した、民間陰陽道という領域の設定は、むしろ、この中世的宗教枠組みをより不明瞭にする傾向がある。

本研究により提示された仮説により、日本の宗教民俗文化の枠組み自体の再考が必要になる。(2)で述べた通り、日本の宗教民俗文化の、構造的な大まかな類似性は、日本人という民族の文化的均質性を示しているのではなく、日本の民衆を取り巻いていた制度的類似性を示す証左かもしれない。この点については、今後、民俗文化研究に限定することなく、日本文化史の枠組みにおいてより広く問い直される問題である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計１０件）

① 佐藤 弘夫、記憶される死者・没却される死者、死生学年報、査読無、11 号、2015、53-69
② 中西 裕二、「本物」の魔力―日本の寺院・神社観光と歴史言説の諸問題、神田外国語大学日本研究所紀要、査読無、5 号、2013、1-11
③ 中西 裕二、寺社参詣と観光、観光研究、査読無、25 巻 1 号、2013、30-36
④ 白川 琢磨、書評：小松和彦『いざなぎ流の研究―歴史の中のいざなぎ流太夫』、宗教研究、査読無、377 号、2013、199-204
⑤ 白川 琢磨、ハイブリッドは日本宗教のお家芸だ、月刊みんぱく、査読無、2013 年 8 月号、2013、5-6
⑥ 佐藤 弘夫、幽霊の誕生、日本学研究（北京日本学研究センター編）、査読無、23 号、2013、7-15
⑦ 佐藤 弘夫、神・彼岸・コスモロジー―歴史学における「空間」の発見、空間史叢書、査読無、1 号、2013、9-24
⑧ 佐藤 弘夫、祟り・治罰・天災―日本列島における災禍と宗教、宗教研究、査読有、86 巻 2 号、2012、323-346
⑨ SATO Hiroo、Kami that Beckon from the Far Shore, Bulletin of Death and Life Studies、査読有、8 号、2012、37-61
⑩ 白川 琢磨、湖底に沈んだ文化資源―地域開発と文化保存、地域共生研究（福岡大学）、査読無、1 号、2012、19-51

〔学会発表〕（計７件）

① 松尾 恒一、フォークロア・パラドックスを止揚する―趣旨説明、「記憶の場としての東アジア」国際シンポジウム、2014 年 8 月 30 日、上海・華東師範大学
② 中西 裕二、災いの解釈における死と生―新潟県佐渡島の憑きもの信仰の事例から、「記憶の場としての東アジア」国際シンポジウム、2014 年 8 月 30 日、上海・華東師範大学
③ 白川 琢磨、多配列クラスとしての“鬼”―修正鬼会から神楽まで、「記憶の場としての東アジア」国際シンポジウム、2014 年 8 月 30 日、上海・華東師範大学
④ 佐藤 弘夫、先祖は山に住むか？―日本人と山・再考、「記憶の場としての東アジア」国際シンポジウム、2014 年 8 月 30 日、上海・華東師範大学
⑤ 鈴木 一馨、“民間陰陽道”はあったのか？、「記憶の場としての東アジア」国際シンポジウム、2014 年 8 月 30 日、上海・華東師範大学
⑥ 中西 裕二、文化的価値の相対性と文化観光―世界遺産観光と宗教から考える、2013 大藏経世界文化祝典 国際学術シンポジウム（招待講演）、2013 年 10 月 14 日、韓国・慶尚南道昌原市
⑦ 佐藤 弘夫、日本と東アジアのカミを考える、国際シンポジウム 関係性における日本・韓国（招待講演）、2013 年 10 月 5 日、台湾・台湾大学

〔図書〕（計８件）

① 鈴木 正崇 編、白川 琢磨、中西 裕二 他、風響社、森羅万象のささやき―民俗宗教研究の諸相、2015、1000
② 中西 紹一・早川 克美 編、中西 裕二 他、藝術学舎、私たちのデザイン２ 時間のデザイン―経験に埋め込まれた構造を読み解く、2014、193
③ 佐藤 弘夫、筑摩書房、鎌倉仏教、2013、263
④ 河東 仁 編、中西 裕二 他、リトン社、宗教史学論叢 17 夢と幻視の宗教史、2012、404
⑤ 佐藤 弘夫、岩田書院、ヒトガミ信仰の系譜、2012、232
⑥ 大橋 一章・新川 登亀男 編、佐藤 弘夫 他、「仏教」文明の受容と君主権の構築―東アジアのなかの日本、2012、8+377
⑦ 白川 琢磨 他、福岡県文化財調査研究委員会、豊前神楽調査報告書―京築地域の神楽を中心として、2012、212
⑧ 白川 琢磨 編、朝倉市教育委員会、朝倉市文化財調査報告書第 17 集 小石原川ダム文化財関係調査報告書、2013、405

６．研究組織

(1)研究代表者
中西　裕二（NAKANISHI, Yuji）
日本女子大学・人間社会学部・教授
研究者番号：５０２３７３２７

(2)研究分担者
佐藤　弘夫（SATO, Hiroo）
東北大学・文学研究科・教授
研究者番号：３０１２５５７０

(3)研究分担者
白川　琢磨（SHIRAKAWA, Takuma）
福岡大学・人文学部・教授
研究者番号：７０１７９０４２

(4)連携研究者
鈴木　一馨（SUZUKI, Ikkei）
(公財)中村元東方研究所・研究員
研究者番号：５０２８０６５７

(5)連携研究者
松尾　恒一（MATSUO, Koichi）
国立歴史民俗博物館・教授
研究者番号：５０２８６６７１